## 一つの反省

早坂文雄

當然か の魅力ある如き都會に足をつけたのは作曲を思考する年形成しそして樂壇と呼んで良いならば)から東京樂壇、そ 平和な札幌の樂壇(この樣なものが我々が主體となつて な機運に遭遇しつゝある時ヂャー 家ではないので理論的に書かれぬことを諒とされたい。 たものでなく種々の斷片的なものであるととゝ私は理論 ととは充分知りつゝ書かうとする。これの內容は に東京滯在雜感の姿を以つて、之は自分 裏面を知らなくても差支へないが、作曲家を觀點としてである。それは表面的なものであつても喜ばしい、その 收獲である。 の樂壇人の動向と貧弱な雰圍氣を知り得たのは快ろよい として, くあらねばならぬことであるが最近作曲界が大き 良否の刺戟があつたのは何の不思議もなく當然 一つの反省としての氣持をこと ナリズムの波の及ばぬ への蛇足となる

に充分な狀態である。が東京樂壇の質的な貧弱さは心あるものを憂へせしむるが東京樂壇の質的な貧弱さは心あるものを憂へせしむるヨーロッパ樂壇と比較する悲哀を今更繰返したくない

ゐるべきであると考へてきたが、然るに之は大いに期待刺戟があつて我々よりも藝術に眞劍であり情熱を持つて 藝術に進歩性を持たせる爲に素質を育て上げ努力してき が、是が為に私の求めて居る藝術への純粹性、眞摯性を及ぼしてゐたことも事實でありそれが倖ひとなつてゐたも考へられ自由に考察し創作して來たために良い結果を 持たなければならぬ事を盲目的なものでなしに、冷靜にむ。しかし自己の反省の一つとしてもつと創作に熱意を て育て上げて ゆき たい心が多い程この間の感情に苦し 東京樂壇人は到底理解は出來ない。 が外れた。刺戟のない札幌に呼吸してゐた我々と大差な か迷はざるを得ない。樂壇を愛し少くともその一人としることを樂壇の爲に悲しんで良いか自己の爲に喜ぶべき はつきり自覺させて下さつたのは皮肉にも東京樂壇であ ムに支配されぬ故に札幌の作曲家は良い還境にあつたと いことを知つた。 我々は眞劍に音樂を考察し反省し表現しそして自己の 東京の作曲界は實際上に多樣な音樂上の機關による 我々は如何にその刺戟を求めてゐたか 然るに之は大いに期待 或る點ヂャー ナリズ

に幸ひであつた。
「京樂壇はその様なものがなかつたのは私のためらが、東京樂壇はその様なものがなかつたのは私のためらが、東京樂壇はその様なものがなかつたのは私のたなら感謝したい。それがヨーロッパの如き樂壇であつたならは日を見つめ批判するものを一層强固に感じさせたのは

る樣に思はれる。さまざまな色彩と匂ひがない。 見た場合、作曲界からわき上る雰圍氣に力が不足してる少ないのではないととがわかるのだが統一し全體として少ないのではないととがわかるのだが統一し全體としてがそれに關して大きな力となるととは申すまでもない。樂壇の完成され、質的な向上は今後にあらう。作曲家

明確なる線をそれに要求したい。 またもつとより以上に迫力がなければならぬ、そしてる樣に思はれる。さまざまな色彩と包刃かない。

がある樣に思はれる。
その様などころに作曲界全體から來る感じに弱々しさ意識してゐない事實は最早藝術向上の停止を意味する。家として見た場合意識してゐない人々が居はしまいか。家として見た場合意識してゐない人々が居はしまいか。

めてからかゝらねば心あるものは決して踊りはしない。代日本作曲家の先づ書かねばならぬものを意識し握りし作曲家が姿態を盡して聽衆に呼びかけようとしても現

む人は極く僅かの人々に限られてゐる。かく作曲家は夢が多過ぎる。藝術家らしい內的要求を摑るがそれが爲に作品をかく作曲家がゐはしまいか。とにれてあつたか否か疑問である。作品發表會は必要ではあれぬ作品發表會をしてもそのものが效果的に內容的に勝大きい支出をしてそれが藝術的なものとバランスのと

とれてゐるのは滑稽である。とれてゐるのは滑稽である。とれてゐるのは滑稽である。とれは感情理性で片づけられる性質のものでなした天的な藝術を生む。これは學んで得られるものでなく先天的な藝術を生む。これは學んで得られる性質のものでなしに藝生れてゐるのは滑稽である。

らう。 多はその作家は少しの人間味もない作品を書くであるならばその作家は少しの人間味もない作品を書くであるならばその作家は少しの人間味もない作品を書くである。

たい。(はいう)と一パーセントの發汗を主張し純粋な素質内的なもの)と一パーセントの靈感(作曲家の質より生れる。私は九十九パーセントの靈感(作曲家の彩を失つた音樂は恐らく聽かれない。根本的に努力は素光十九パーセントも發汗したら作品は死んでしまふ。生ジャック・イベールの有名な言葉もあれは嘘である。

暗示を受けるに相違ない。 ・ローオネガーの如く不純なものが多く作品に入る程 を放った。作曲家としては面白くなるが私はそれと全く反對 をいいた作曲家の方に藝術的な存在意義が深い き考 次である。日本の作曲家も不純なものが多過ぎる。作曲 家たるもの少しはサティの作品も研究して見れば私の云 家たるもの少しはサティの作品も研究して見れば私の云 家たるもの少しはサティの作品も研究して見れば私の云 家たるもの少しはサティの作品も研究して見れば私の云 な内的な純粋性靈感が理解されるであらう。サティの音 に危險性が伴ふがサティの創作態度からは非常に立派な に危險性が伴ふがサティの創作態度からは非常に立派な に危險性が伴ふがサティの創作態度からは非常に立派な

とするに足る。とするに足る。とするに足る。とするに足る。とするに足る。とするに足る。とするに足者した場合、作品をこれまでにしたのは遙感の力が大きかつた事に氣が付かなければならない。靈感の力が大きかつた事に氣が付かなければならない。靈感の力が大きかつた事に氣が付かなければならない。靈感の力が大きかつた事に氣が付かなければならない。

化されゝば倖ひであらう。るけれ共それに期待するのは危險である、その半ば具體現代日本作曲界でも新しい道を開拓したい意向も見え

作曲家の諸氏と共に大いに考察し、進みたい氣持でゐ

ただがあるが大變失禮な言葉である。での完成された時代に足跡を殘す人間として。

しもの」なる言葉を喜ぶよりも反つて苦痛を感ずる。れたものであるので眞摯性を尊ぶ私には「素晴しい掘出造り上げてしまうであらう。それは私の本質とは大部隔依つて私を知らぬ人々はそれぐ~に想像し一つの概念をとればギャーナリステイックな言ひ方であるがこれに

がすことの出來ぬことではないか。
るがこれも向上の途にある我が樂壇の一現象として見逃を自ら望んでゐるものがゐる、その心狀はよく理解出來を自ら望んでゐるものがゐる、その心狀はよく理解出來

作品が理解されようと望むならばこのデャーナリズムを利用するのは利口な方法であるが、これを意識せ、一つのオルガンとして相對し、チャーナリ險を意識し、一つのオルガンとして相對し、チャーナリーの波紋に乘つては真に理解されるものではない。自ら危の方にない。自ら危いが、これを意識せんが、これを意識せんが、これを意識せんが、これを表現している。

ナリズムは恐るべきものである。社會的に見て音樂には無智な人が多いのでそのヂャー

社會人に理解さすべき好意と虚心とを持つて頂きたい。ザャーナリストは作曲家に對してもつと真に作曲家を

る意圖と必然性を指揮者は考へねばならない。るがとゝで一考しなければならぬ事は現代音樂を演奏するがとゝで一考しなければならぬ事は現代音樂を演奏する限りの援助を惜まない。次にすべてに云はれる事である限りの援助を惜まない。次にすべてに云はれる事であるがとゝで一考しなければならない。我々も出來得かせたのは嬉しかつた。演奏の良否は種々に言はれるとかせたのは嬉しかつた。演奏の良否は種々に言はれると

るが留意すべき問題である。時何の效果もなくなる、これは普通あり勝ちなことであ時何の效果もなくなる、これは普通あり勝ちなことである

或る一面を反映してゐると見てよかろう。き演奏家を觀賞したいものであるが、これも現代日本の代になりたいものである。ゆつたりした心持で會場にゆピン級が來朝してもこの樣な氣狂的騷ぎはしない樣な時ピン級が來朝してもこの樣な氣狂的騷ぎはしない樣な時

分時間のなかつたのも惜しいことであつた。しいアメリカの狀況を詳しく聽きたいと思つてゐたが充交へたのは良い印象であつた。鰐淵氏などにももつと新ひであつた。作曲家演奏家の方々と種々にわたつて話をこの度の東京滯在中音樂上の新しい知已を得たのは倖

ずる。そして環境が變り風景が違ひ人間の裝飾が違ふとを過してもこの度の旅行は樂しいものであつたことを感ともかく色々なことを考へさせられ、めまぐるしい日

い日本の文化の中樞を見た。作曲家の立場から精神の危機を强く意識せざるを得ななるものを現實に見せつけられ打たれるものがあつた。なるものを現實に見せつけられ打たれるものがあつた。よい作品が書けることを教へられた。東京滯在の印象はよい作品が書けることを教へられた。東京滯在の印象は

難くない。

・はいりついあるとは言へ、より以上の苦鬪を豫想するにしても、現實性を持たせる實際的な價値が理解される日しても、現實性を持たせる實際的な價値が理解されるにしなりで、我々の傾向上に就いての主張は現代國民の幾い

せめてものなぐさめである。と、に藝術運動を志す一人としての喜びを發見するのは、現代日本の社會文化なるものゝ惡影響の爲に。しかし

私の場合原稿を書くことは自分の無能、弱點を公にする様なものであると考へてゐたが柿沼主幹から何か書くさで、また日本作曲界に進歩性を持たせる爲に心の美くさで、また日本作曲界に進歩性を持たせる爲に心の美くといジャスミンの匂ふ花園の中に我が身をもち運ばうとしいジャスミンの匂ふ花園の中に我が身をもち運ばうとしいジャスミンの匂ふ花園の中に我が身をもち運ばうとしいジャスミンの匂ふ花園の中に我が身をもち運ばうとしいジャスミンの匂ふ花園の中に我が身をもち運ばうとしいジャスミンの匂ふ花園の中に我が身をもち運ばうとしいジャスミンの匂ふ花園の中に我が身をもち運ばうとしいジャスミンの匂ふ花園の中に我が身をもち運ばうとしいがあると思います。

## A Reflection By Fumio Hayasaka

Although I realize that what I write here might be superfluous, these are my impressions on my stay in Tokyo... my feelings, a reflection of sorts, and written not only for my own benefit. Please understand that the various thoughts I write here are fragmentary and inconsistent, as I am not a theorist and I cannot write in a systematic manner. Although this is to be expected, the world of composers as of late is being presented with great opportunities. The Sapporo music community (of which we form the core, if indeed we can be called "the music community") remains peaceful and untouched by the waves of journalism. Being of an age where I should seriously think about my composing, I traveled from this community in Sapporo to visit with the Tokyo music community and saw the attractions of the metropolis. It's no mystery and indeed unquestionable that I was certainly influenced, in both positive and negative ways. It still would have been joyful even if it was just a superficial [excursion]—and the details are of no real consequence; but it was refreshing<sup>2</sup> to be able to learn about the trends in the music community there and about the meager atmosphere, from the point of view of a composer.

Without bothering to rehash the miserable comparisons between the Tokyo and European music communities, the meager quality of the Tokyo music community is sufficiently depressing for those in the know.

We have given serious consideration to, reflected upon, expressed, and worked hard to raise the level of our musical aptitude with all sincerity, in order to establish a progression in our own art. I believed that as the Tokyo composing world offers the stimulation provided by many diverse musical organizations, they should be more devoted to and passionate about their art than we are. However, we were wrong. Our expectations were greatly disappointed. In fact, I found that there really isn't much of a difference between the composers in Tokyo and those in Sapporo, where I have been making my living. The Tokyo music community must have no idea how much we needed the stimulation there. I had believed that as the composers in Sapporo are unaffected by journalism and thus

<sup>&</sup>lt;sup>1</sup> Literally, "theoretical" (riron-teki-ni).

<sup>&</sup>lt;sup>2</sup> Literally, "a refreshing (or pleasant) harvest" (kokoroyoi shuukaku).

have been in a very good environment, with positive results. Owing to this fortuitous fact, we have been able to give consideration to and create our works freely. Still, I am now confused as to whether to feel happy about the music community in Tokyo<sup>3</sup> or to be saddened by it. The irony of the matter is that they have<sup>4</sup> clearly led us to an awareness of the purity and sincerity of the art we pursue. The more that I love the community of musicians and want to nurture them as one of their own, I am aggravated by these confusing feelings. That said, as a point of reflection, I am thankful for having come to a firmer realization that within the compulsion towards being passionate about what one creates, one should look upon and be critical of oneself in a detached manner<sup>5</sup>, rather than just blindly believing that it must be so. If the music community in Tokyo was like that of Europe, the fighting spirit of the community would have been crushed and blinded; so it is thankful for me that the music community in Tokyo is not like that.

The music community<sup>6</sup> will eventually be perfected and rise to a higher level of quality. It goes without saying that it is the composers who will play a large part in this.

When looking over the world of composers, I can certainly tell that each composer carries no small passion for creating music; but when taking a uniform look over the entirety, the atmosphere bubbling upward from the community seems to lack in strength. There seems to be a lack of variation in color and flavor<sup>7</sup>.

I want to see more commanding performances than ever before, and a clear direction.

Though each composer's association is involved in their own activities, when looking at the question of how significant of a result these activities will bring in the future from the standpoint of each composer, I would say that just about everyone is aware of this issue. Being unaware of the reality will lead to the halt of progress in the arts.

It seems that this is a weak area, based on my impression of the entire world of

<sup>&</sup>lt;sup>3</sup> "In Tokyo" is an interpolation based on context. It seems likely that he is speaking of his feelings towards the Tokyo music community, as they have inadvertently influenced the Sapporo music community due to their failings, which Hayasaka mentions here. However, this could be interpreted to read that he is unsure whether the feel happy or sad for his own (Sapporo's) music community, as they have indirectly benefitted from knowing about the problems with the Tokyo music community, and thus may feel more reassured that their own community is on the right track.

<sup>&</sup>lt;sup>4</sup> Or perhaps, "their failings have".

<sup>&</sup>lt;sup>5</sup> Or, "with a cool head".

<sup>&</sup>lt;sup>6</sup> Possibly the Sapporo music community, but more likely Hayasaka is referring to the music community in its entirety.

<sup>&</sup>lt;sup>7</sup> Literally, "scent" (nioi).

composers.

Even though composers might do their best to reach out to their audience, they must be aware of and get a grasp on what modern Japanese composers need to be writing, so as not to be deceived.

One might go to great expense and hold a composer's recital that does not feature artistic work worth the occasion, but I doubt whether this will be superior in terms of its results and contents. Composer recitals are necessary, but no one writes a piece just for recitals. Anyway, the fact is that composers just have too many big dreams. There are very few people who have a good grasp of their artistic tendencies.

This is not something that can be qualified by emotions and rationality. Rather, it is shaped by the mystery and uniqueness of the artist. All art is brought to life through the singularity of the artist (the soul that resides within him). The reason why there are so few talented composers is because artistic tendencies are not something you can obtain through study—they are innate. It is ridiculous to see that there is a balance being maintained between talented composers and those who are not<sup>8</sup>, who are both holding ineffective recitals.

If composers could reach greatness through study (efforts made to learn), the music that they write would be devoid of humanity<sup>9</sup>.

Jacques Ibert's famous words are a lie. If pieces require "99% perspiration", they will wither away <sup>10</sup>. Music that is devoid of liveliness is not likely to be listened to. Fundamentally speaking, one's efforts spring forth from aptitude. My view is that it is 99% inspiration (the pure inner aptitude of the composer) and 1% perspiration.

There are many impure composers like Ladmirault and Honegger<sup>11</sup>, whose works grow in interest the more they are listened to; but I think that there is a deep artistic meaning to the existence of composers on the completely opposite pole like Satie, who wrote only with the purest of what they possessed. Although such composers do not contribute<sup>12</sup> to

10 Literally, "die".

<sup>&</sup>lt;sup>8</sup> The original Japanese can be interpreted in various ways, but it seems likely that Hayasaka is referring to the contrast of composers who have talent but no money, as opposed to untalented composers who have money but talent, both holding composer recitals.

<sup>&</sup>lt;sup>9</sup> Or, "soulless".

<sup>&</sup>lt;sup>11</sup> The original Japanese reads "Miroo-Onegaa", which is likely a reference to period composers Paul Ladmirault and Arthur Honegger.

<sup>&</sup>lt;sup>12</sup> Literally, "a loss to society". This most likely refers to the thought that purely artistic works do not contribute to the public interest at large.

society, the life of their works is eternal. That said<sup>13</sup>, there are far too many impurities in Japanese composers as well. If composers who call themselves such would take the time to research Satie's work, they would understand what I mean by the pure inspiration inside of them. Although I may be wielding a double-edged sword<sup>14</sup> to say this, from the composer's point of view, as Satie's work excels so greatly and is quite singular in nature, one can gain remarkable clues from his attitude towards creating music.

When composers have expended a tremendous amount of effort in completing a piece and then reflect upon that work, they must realize that it was by far the influence of inspiration that allowed them to complete the task. I put my foot down when I say that composers who do not come to this realization are merely frigid composers who have not the least bit of perception. It is odd to see so many impure Japanese composers who are also frigid.

We can see that the world of modern composers in Japan have the desire to forge a new path, but there is a danger in expecting that it will happen; yet it would be fortunate if it truly did come to reality.

As someone who wishes to leave behind his footsteps for a more perfect era, I would like for all of my fellow composers to consider this together with me as we move onwards.

I feel offended by the words of the writer of a certain magazine, who had recently described me as "a spectacular find".

Although that's something that journalists might say, people who have no knowledge of me might read this and build their own preconceived notions of who they imagine me to be. Such notions are far from the essence of what I am. As such, being a man who highly respects sincerity, hearing the words "a spectacular find" is not a thing of gladness, but rather of distress.

I can understand the feelings of those artists who aspire to selling themselves in the throes of journalism. However, in regard to our community of musicians, who are still in the midst of progress, we cannot condone such behavior<sup>15</sup>.

<sup>&</sup>lt;sup>13</sup> Added by the translator to indicate a break in thought. Hayasaka did not bother to add conjunctions to connect his thoughts in many places in this essay; and the only breaks in paragraphs are the ones made by the publisher of the printed edition (which may or may not have been present in the original manuscript, presumably handwritten). I have observed the paragraph breaks in the printed edition in this translation.

<sup>&</sup>lt;sup>14</sup> Literally, "this is accompanied by considerable danger".

<sup>15</sup> Literally, "phenomenon".

If we desire for our work to be understood, our work will not be understood in the truest sense by riding the waves of journalism. There lies a clever way to use journalism by recognizing the dangers and handling it as one method; but I'd like to reflect upon the fact that many composers have recognized this and failed, which plainly gives credence to what I am saying.

Journalism is a fearful thing. There are many people in our society that are clueless when it comes to music.

I would like to see journalists approach composers with more goodwill and open-mindedness, so that composers will be understood by the members of our society.

I was delighted that the our community's new orchestra played "The Fountains of Rome" by Respighi for us at their January concert<sup>16</sup>. As for the quality of the performance, much has been said; but their attitude towards playing contemporary classical music is certainly favorable. We will certainly extend our support in whatever means possible. The next thing that could be said (which actually applies to the entirety) is that the conductor must give some thought to the purpose and necessity behind playing contemporary classical music.

It often happens that the conductor falls into the same old rut, making the music lose its effectiveness, but this is certainly a problem to bear in mind.

My heart is greatly aching to hear some wonderful live performances. Having said that, I want to see the time come when the masses don't get so insanely excited about someone of Shalyapin's caliber coming to Japan. We might say that kind of uproar reflects one facet of modern Japan, even though I think it better to go to the concert venue and listen to those performing with a feeling of ease.

I feel that it was quite fortunate for me to have acquired a new musical self during my stay in Tokyo this time. I had a favorable impression of those composers and performers with whom I was able to exchange conversation with on a variety of topics. Although I wanted to ask Wanibuchi more about the situation in America, I regret that there wasn't enough time.

At any rate, although I was given many things to think about and each day passed by at a dizzying pace, I enjoyed the trip this time. I learned that one can create good work with

<sup>&</sup>lt;sup>16</sup> The original Japanese reads "ichi-gatsu-teiki" (concerts held every January), but could also be read as "hito-tsuki-teiki" (concerts held every month). The former seems more likely.

a change of environment, different scenery, and seeing the different things that adorn the

lives in which the composers live. I was left with many impressions during my visit to

Tokyo. Aside from those related to music, this trip caused me to see the reality of culture

in particular, which struck me.

I saw the core of Japanese culture, the crisis of mentality which we must be firmly aware

of as composers.

I felt that we must re-evaluate our deeply rooted national traditions. What percentage

of modern Japanese people will pay heed to what we are asserting, in regard to the trends?

Even though this may make its mark in history, and the time is coming when real value

that carries realism will be understood, it is not hard to imagine an even greater struggle

occurring due to the negative influences from modern Japanese social culture. That said,

at least I can be consoled by the happiness I find in this, as a member of the artistic

movement.

I had believed that writing a paper would be like publicizing my own incompetence and

weaknesses. That said, I am writing this under the request of director Kakinuma, so I just

resolved to do it anyway, even though I had no time to really think about what to write

and how to put it together. It's all very fragmentary, but I can say that I feel much lighter

now that I have fulfilled this responsibility. Now I can rest on my laurels, being within a

garden with the beautiful scents of jasmine in my mind, in the thought that this is for the

progress of composers in Japan.

Translation: Jeff Chapman